

08

木の葉の 衣装替え

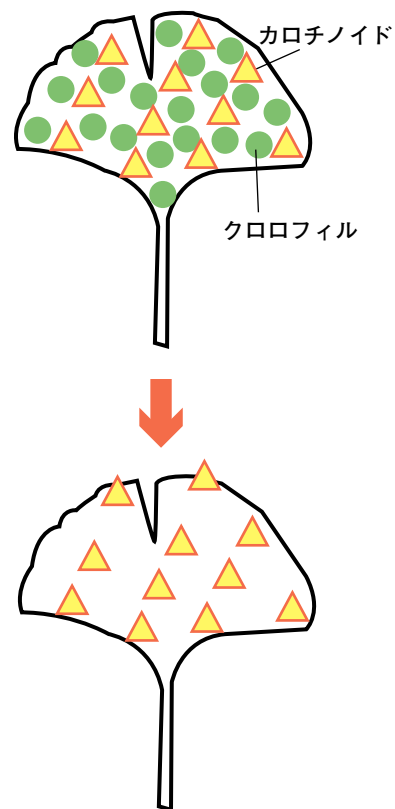
若葉、青葉、紅葉（黄葉）、落ち葉……。季節の移り変わりとともに姿を変える木の葉は、美しい風景の大切な要素のひとつと言えます。しかし木の葉がこのように姿を変えるのは、わたし達の目を楽しませてくれるためではありません。気候の変化に応じた自然の営みなのです。

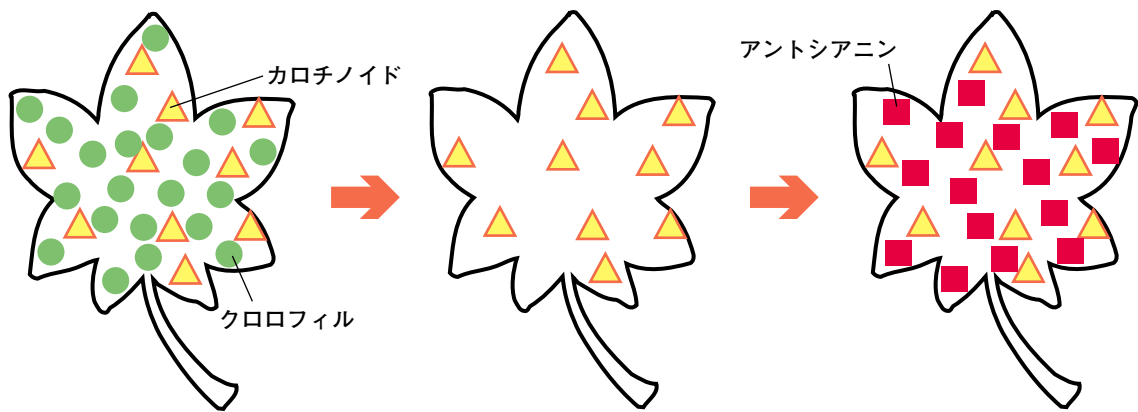
木の葉は一般に普段は緑色をしています、これは「クロロフィル（葉緑素）」という緑色の色素が含まれているからです。クロロフィルは、太陽の光（エネルギー）を吸収して、二酸化炭素と水を栄養分（糖やデンプンなど）と酸素に変える働きをしています。これを「光合成」といいます。

葉にはそのほかにも「カロチノイド」という黄色の色素が含まれていて、クロロフィルが吸収しきれない光を吸収したり、またその反対に余分な光を遮断したりして、光合成を助ける働きをしています。しかしクロロフィルの方がカロチノイドに比べてはるかに量が多いため、緑色の方が目立つのです。

秋になって気温が下がり日照時間が少なくなると、光合成をする働きが衰えます。そのまま葉をつけていると表面から熱や水分が奪

われやすくなり、かえって弱ってしまうため、樹木は一般に冬を迎える頃に葉を落とします。その時期が近づくと、葉ではクロロフィルやカロチノイドがつくられなくなります。そして葉の中に残っていたものも次第に分解されていきますが、カロチノイドの方がクロロフィルよりも分解される速度が遅いため、クロロ





フィルが減っていくにしたがい、カロチノイドの黄色が目立ってくるのです。

やがて、枝と葉の間に「離層」と呼ばれる仕切りがつくれ、水分や栄養分の行き来がなくなります。そして樹木によっては、葉の中に残された糖分等から別のあらたな色素がつくられることがあります。例えば「アントシアニン」という赤い色素がつくられると、モミジのように葉が赤く変化し、「フロバフェン」という褐色の色素がつくられると、クヌギのように葉が茶色く変化するのです。

う役者によって演じられるエンターテインメントを楽しませてもらっているのです。

(平成15年11月)

お芝居などで、舞台裏等ですばやく着替えて違う衣装で登場することを「早替わり」といいます。特に歌舞伎では、あらかじめ衣装を重ね着しておいて、舞台上で一瞬にして上の衣装を取り去ると下から別の衣装が現れるという、「引き抜き」と呼ばれる技法があります。樹木にとっては生命現象である紅葉や黄葉ですが、その結果わたし達は、木の葉とい

